
蒼雪の街

佳生

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼雪の街

【Nコード】

N0629B

【作者名】

佳生

【あらすじ】

蒼い雪の降る街は、森に護られた白い塔を、内に抱えていた。そこには、“白塔の幽霊少女”“蒼雪の守護者”“紅街の化身”という、三つの都市伝説があった。死という境界線を見た、彼らの運命は漸く交わる。

一話目：紅街の化身（前書き）

少々、きつい表現があるかもしれません。（サイエンス・ファンタジーのSFです）

一話目：紅街の化身

青い蒼い碧い。

その街は生きている。

街はヒトを見る。

街はヒトを見る。

彼は街を見る。

そして、ヒトを見る。

街のような、街の化身のような彼は、塔を指差し呟いた。

青く蒼く碧く、透き通るような声で、呟いた。

「約束なら、あそこにある」

誰の約束か。

青く蒼く碧い瞳で、彼は塔を見上げた。

美しく、気高く。

街はヒトを見る。

時に、街はヒトを試す。

彼は、容赦などしない。

極々不変の、それは闘争本能。

決して、決して、街はヒトの味方ではないという事を、彼は知らしめる。

街とて、人に近いのだと、生きているのだと、彼は知らしめる。

街が彼を産んだのか、彼が生まれたからこそ、街が生き始めたのか。

そんな事に意味はない。

そんな果てしない考えなど、誰もしようとはおもつまい。

だから。

彼は奔放に生き続ける。

人間らしい人間の生きる、この街で。

二話目：蒼雪の守護者

体全体を引きずるようにして、彼は歩いていた。

擦り切れた、どれもサイズの大きな衣類は、だらしなく垂れ下がり、より怠惰に揺れている。

黒く艶のある髪は、歩に合わせて揺れていた。

その合間から覗く瞳は、表現しがたいほどの、アオ。

青であり蒼であり碧であるアオ。

虚ろだが輝きのある瞳は、今は石の埋め込まれた地面へ向いている。

何を見たいのか、自分でも分かっていないような瞳は、どうしようもなく輝きを秘めていた。

そして彼は顔を上げる。

小さな物音に反応した獣のように、彼は横道を見た。

人がいた。

「……………」

何かを紡ぎだそうとした喉から声が出ない。

反応を示した自分に、そして白い少女に驚いたように、彼は瞳を開く。

同時に、走りだしていた。

助けないと

なぜそう思ったのか。

彼は少女を囲む集団に、単身殴りかかった。

彼は別に、腕に覚えがある訳ではないし、このような場面に慣れている訳でもない。

しかし、彼の拳はためらいもなく相手の顔面をとらえた。

頬を挟んで、相手の歯の硬さがよく分かる。

中々の勢いで決まったそれは、相手を倒し、仲間の一人を巻き込んで地面に叩きつけられる。

その二人を見下ろしていると、右の二の腕に、ボキボキとバキバキと聞こえてくるような衝撃を受けた。

痛い、以前に動かない腕に驚き、数歩後ろに下がる。

腕を折った鉄パイプの襲撃をかわすので精一杯だが、彼は何とか逃れるタイミングを見つけようと、周囲を見る。

が、何もない路地裏で簡単に見つけられるものではない。

ジンジンと地味な、しかし痛烈な痛みを認知し始めた腕に嫌な汗をかきながら、彼は歯を食い縛った。

そして。

「あ…っ……ぐ！」

間抜けにも聞こえる破裂音が、彼の耳に届くと同時に、彼は三度の衝撃を受けていた。

破裂音は二度しか聞いていないのに、と考えていた彼は、仰向けで薄汚れた地面に倒れ伏していた。

その視界に、拳銃と鉄パイプが映る。

最初に右足を射たれて、バランスを崩した所を、鉄パイプが頭を殴り、左肩を撃って、彼は倒れた。

頭の中で考えながら、彼は額に押し当てられた銃口の冷たさを感じていた。

拳銃と、男集団と、鉄パイプ。そして無機質な街並の中心に、教会を思わせる鐘を携えた塔がある。

あそこだけは、街の中で白い。

街の中心にある塔は、この街自体から守られるように、それが崇められるように、緑の敷地を挟んで存在していた。

街の中心部にある、森。

森の中心にある、白い塔。

それを眺めながら、彼は男の指を見た。

引き金を引く指を。

余りにも近すぎて、音が分からない。

ただ、勝手に体が跳ね上がり、筋肉が弛緩していくのが分かる。

瞳孔が開いて、更に焦点の合わなくなった視界で彼は、去り行く男集団と、白い塔を見ていた。

広がる赤い血。

薄汚い路地に吸われるそれをに、何かが溶け込んだ。

白ではなく、蒼に輝く雪。

しんと、それは降る。

彼の体を包むように、血を吸い上げるように、ただ降り積もる。

と、彼がピクリ、と動き、大きく息を吸い込んだ。

穿たれた傷が雪により塞がると同時に、そこは素の通りの細胞に戻る。

皮膚は皮膚に、筋肉は筋肉に、骨は骨に、脳は脳に。

開いた瞳孔が素の通りに戻ると同時に、彼は起き上がった。

「俺は、一度死んだんだ」

蒼の雪が降る街で、彼は囁いた。

人語を解するとしか思えない、白の塔の守護域、年中緑を讃え続ける森。

その生命線、その長、その中心たる大樹がある。

根が、巨大なドームを造るかのように隆起しているそれは、あたたかも大樹自身が立ち上がっているようにも見える。

「お前、死んだことないだろ」

手の平で、紅い刃を弄びながら、彼は笑う。

黒い髪。蒼の瞳。白い肌。くたびれた服。そして、芳しい程の緑の香。

「お前、死ぬか？」

街に来た日に、都市伝説を前にした自分は。

「……………」

喉をやられた。話す事はおろか、呻く事すら出来ない。

なんとかここまでは来れたが、これ以上は無理だろう。

「…………死ぬか？ ……生きるか？」

「……………」

しゃがんだ彼は、髪を引っ張りあげて、目を覗き込むように顔を近付ける。

瞬間、ふわりと、花ほど甘くない、むせ返る程の緑でもない、しかし、森の香りがした。

それは、眠りに誘うように、ゆっくりと脳内を侵食する。

「…………意志が無いなら、俺の変わりに、生き続けてくれないか？」

さわさわ、と。

森が鳴った。

「死して生きるのではなく。生き続けてくれないか？ 共にあるのではなく、共存してくれないか？」

さわさわ、さわさわ。

騒めくように、自分に理解出来ない言葉を、森が発する。

その音すら、遠ざかる。

死ぬとか、生きるとか。

そんな事は考えられなかった。

ただ、彼の言葉だけが

「波紋を、起こしてくれ。

T a d W o t o E r i s

《涙一雫、水面 二 触 レテ、大 キク 波紋 ヲ 広 ゲル》

..... K n o t K n o t K n o t

《知 ラヌ 間 二、知 ラヌ 間 二、知 ラヌ 間 二》

..... E t r o u S i l l i n s E k n o

《全 テヲ 通 リ 抜 ケ、静 ケサノ 中、全 テヲ 知 ル》

.....」

言っている言葉は分からない。

でも、意味は分かる。

最後に、森の姿を見ながら、彼の言葉を聞いた。

「..... You l f E y e n R e c e i s t o
《汝、眼ヲ開ケ、受ケ止メヨ》」

三話目：ダブルナイト

紅い刃が、今日も振るわれる。

人間の中身を知りたいのかと問いたくなるほどに、それは見事に切り刻まれていた。

彼らには蒼の雪は降らない。

蒼の雪が降るのは、彼にだけだ。

それは、あの雪を降らせているのが、あの森、引いては大樹であつて、森は彼だけの味方だからだ、と、博士が言っていた。

そして、自分は彼に出会った日から、博士の犬となった。

「貴方の命を実質拾ったのは私よ？ 私はお金で買えない命を、わざわざ拾ってあげたのよ？ 貴方が私に尽くすのは当然でしょう？ だから貴方は、私の助手で執事で召使で奴隷で犬なのよ？ 分かつた？」

まるで飼い犬に言い聞かせるように博士は言った。

肯定しようにも、否定しようにも、ベッドの四隅に鎖で繋がれたままではどうにもできない。

首は、浅からぬ傷により、動かすと激痛が走る。

「あ、言っとくけど、貴方、一生喋れないからね。そんな報復を受けるようなことしたんでしょう？　可愛い顔して、すごいことしてるのね」

逃げ出さないように。

繋がれたまま、ボンヤリと自分が何をしたのか考えてみた。

特に何も思いつかない。

どうしたのだから。

「……所で貴方、本当に喋れないの？」

「……？」

自分で一生喋れないと言っておきながら、なぜ今更聞き返すのだろう。

「貴方、都市伝説に助けられてたじゃない。見てたわよ」

ああ、そうだった。

“蒼雪の守護者”という異名を持つ、実在する都市伝説と話したんだった。

何の目的で？ いや、その前に、何でここに来たんだ？ 何の為にここにいる？ 今まで、自分は何をしていた？ どうしてこんな事になっている？

ここは、どこだ？

頭の中が真っ白だ。

「まあいいわ。傷治してあげるから、完治するまで寝てなさい」

「……………」

完治するまで、寝る？

「伊達に高度な医療器具を持つてる訳じゃないのよ？」

「…………っ!？」

痛いのか冷たいのか、それともくすぐったいのか分からない感覚が体中を滑るように降ってゆく。

「コールドスリープの応用よ」

その声を聞きながら、自分は深い眠りについた。

†

†

街は、その日から生きる事を始めた。

森の存在を認め、塔の存在おも認め、そして自らの存在を認めた。

街は、僕を見る。

僕は、街を見る。

そして今日も、この街は人を食らう。

「大丈夫ですか、博士」

「ええ。貴方のおかげで」

指先と口の周りを異様に汚した赤色を、袖口で拭いながら、僕は首と腕を食い千切られて絶命した男を見下し、一部始終を眺めていた博士に視線を向ける。

僕が博士を襲った男に飛び掛かって何をしたのか分かっているくせに、彼女は微笑んだままだ。

「さすが、私の飼い犬ね」

「……はい」

白衣で拭き残した赤色を拭って、博士は微笑む。

僕は、もうただの人間ではなくなった。

“白塔の幽霊少女” “蒼雪の守護者”

それらの都市伝説と肩を並べて、僕は“紅街の化身”となった。

その証拠に、僕は今、話す事ができている。

喋れない、と言われていたのに。

「“紅街の化身”を従えるあんたは…まるで、街の女王だな」

「……あら、“蒼雪の守護者”さんじゃない？ 随分物騒なものを
持っているわね」

「あんたこそ、随分血を吸ってるみたいだな」

「血を吸っているのは僕だ。博士は何もしてない」

もとより赤い刃のナイフを、違う紅で濡らした彼が、それ以上、博士に近づかないように僕は前に出る。

すると彼は少々驚いたようにナイフを引く。

「本当に、忠実なんだな」

「僕は、博士の犬ですから」

「……………」

血のように紅い目をしているらしい僕と、あの雪のように蒼い目をした彼。

睨み合うことはなく、ただ存在を確かめているかのようだ。

「やめなさい。 そんな事をしている時間は無いわよ」

「はい」

そんな僕らにかまっていられない、という表情で、博士はラボへの道を歩く。

畏怖と恐怖、そして神にも似た存在を背にして、博士は堂々と歩いてゆく。

「お前がそうしていたいなら、そうしてればいい。だが、“紅街の化身”は人間ごときが支配できるものじゃない。

…………… Goulur 《幸運ヲ》」

「…………… ヤカサハ《余計ナ才世話ダヨ》」

遠ざかる博士に遅れないように背を向けた僕に、彼はただ言つように語りかける。

最後、彼は森の言葉を話した。

だから僕も振り返り、街の言葉で話した。

彼は、何も言わない。

僕は博士を追い掛けた。

四話目：白塔の幽霊少女

「博士、“白塔”の女の子に……会ってみたいです」

「えっ!？」

僕が言うと、博士はとても驚いた顔になった。

僕はそんなに驚かれるような事を言ったのだろうか。

博士は相変わらず目を真ん丸にしている。

「無理なら、別に」

僕が言うと、博士はまたコンピュータに向かい、けれども、こう返した。

「……そういう事は、私じゃなくて“蒼雪の守護者”に言ったらどう?。」

「彼は見付けるのに時間がかかります」

「私に頼んだって、彼女の居るところなんて分からないわ。神出鬼没だから“白塔の幽霊少女”って呼ばれているんだもの」

なるほど。考えてみればそうだ。

博士の説明に相槌をうち、僕は考える。

どうしたら会えるのか。

けれどもどうも僕は考え事をするのには向かない頭をしているらしい。

どうしたら会えるのかを考えていたはずが、いつの間にか、どうして会いたいのかを考えていた。

僕にはやはり、荷物運びや、博士の護衛と言った仕事しか出来ないようだ。

「散歩に行つてきます」

ラボに居ても、博士の邪魔にしなければならないだろうから、僕は考えがてら、外の空気を吸いに行くことにした。

音を立てないように歩き、同じく扉を閉める。

二時間くらいしたら一旦戻ってこよう、と思いながら、僕は石畳の通りへと足を踏み出した。

人は相変わらず居ない。

この街の人間は、原則出歩かないのだ。

きつと、昔はそうではなかったのだろう。証拠に娯楽施設跡の建物が結構な数で残っている。

ラボは、昔、病院だった場所の地下を改良して造られているらしいが、僕にはよく分からなかった。

あそこで生活している割には、全くと言っていいほどラボの事は知らない。知る必要も無いんじゃないかと思った。

「ん？」

それは人通りのない大通のさらに中央を歩いていた時だった。

視界の端で何かが動いた気がして、僕はそちらに視線を向ける。

「……」

一瞬、どうするべきか迷った。

通常なら迷う必要は無いのだが迷った。

覗き込んだ裏路地で、数人の男に、細身の少女が絡まれていた。

ボロボロの白いワンピースの上に、赤い、冬に着るような上着を着

込んでいる。

透き通るような肌に、プラチナの髪。そして、吸い込まれそうなほどの、白い瞳。

不安そうな彼女と、目が合った瞬間だった。

僕は直感する。

“ 白塔の幽霊少女 ” ！！

間違いなかった。

“ 紅街の化身 ” としての僕の直感がそう言っている。

助けなければと思うよりも早く、僕の体は動いていた。

地面を蹴り、獣のように男一人の背を引き裂く。

注意は彼女から逸れ、僕へと向いた。威嚇するように唸ると、男達だけでなく、少女の方まで脅えてしまっている。

面食らったのは僕の方だ。

なぜ彼女が絡まれているのかも気になるが、そんな気弱そうな彼女が、なぜ街に姿を現すのだろう。

と、一人の男が、いきなり僕に体当たりをして、それからダッシュ

で逃げる。その拍子に他の奴らも、あの少女すら走っていつてしま
う。

「ま、待って……！」

慌てて追い掛けた僕だったけれど、思ったより彼女の逃げ足は遅か
った。

待つてと言いつわる前に、直ぐに彼女の腕を掴むことが出来た。

「う……う……！」

けれど、彼女はとても脅えた表情で僕をみる。まるで、化け物でも
見るみたいに。実際化け物じみているのだから、傷付く必要はない
のだけど。

「君……“白塔”だよな？」

僕の問いに、小さく震えながらも彼女は頷いた。彼女の後ろに、白
い塔と、碧の深い森、そして赤煉瓦の街並みが見える。

なんとなく、彼女に出会えたことに満足感を覚えた時だった。

「D o t t o h e r 《彼女に触れるな》！！」

という怒声に、僕は手を放し、後ろに飛ぶ。

地面には、例の赤いナイフが刺さっていた。遅れて、僕と彼女を隔てるように、“蒼雪の守護者”が降り立つ。

ふわりと、蒼い雪が僕の側を風に乗って舞う。少女は彼の背に隠れるようにして僕を見ている。不安そうな目だ。

「“紅街”の分際で」

明らかに敵意の籠った目だった。今までに一度も、彼にはこんな目で睨まれた事はない。

しかも、分際とはなんだ。

自分はそんなに偉いのか。とても不愉快だ。

「お前に資格はない。さっさと消えろ」

腹が立った。ここは塔でも森でもない。街だというのに。僕の領地だというのに。

勝手に入ってきた奴に、そんな事を言われたくはない。

けど。

「消えないなら……消すぞ」

紛れもなく、本気の言葉だった。

そしてそれに憤り、とびかかった僕は……一瞬にして地面に叩き付けられて、その力の差をしまった。

お前は街に支配されているだけ。

その言葉が、痛いくらい、胸に染み込んだ。

五話目：街の外から

ラボに帰った僕は、まず最初に博士に笑われた。

“蒼雪の守護者”に敵うわけがない、と。

どうして敵う訳がないのかは知らないが、実際敵わなかったのだから、黙って笑われておく。

「まあ、仕様のない事なのよ。だって貴方は、まだこの街にあつてないのだもの」

「……？ 比喻ですか？」

「いいえ、違うわ」

博士の言っていることがよく分からない。

いや分からないのはいつもの事だけれど。

「都市伝説の存在には、つき物よ。例外は白塔の子だけ」

「？」

「蒼雪も紅街も、それぞれ母体的な存在があるの。それに会っているかいainiかが、貴方と守護者の違いよ」

「……はあ」

分らない。全く理解できない。どこが分からずに理解できないのかすら不明だ。

博士は何が言いたいのだろう。

「……はあ、全く」

溜め息をつかれた。

しかし仕様がな。蒼雪は僕を生かしたけれど、それだけだ。街にしたって、身体的能力は上げても、知的能力に関してはさっぱりだ。前より下がった気すらする。

「ほら、貴方、今、自分で言ったじゃない」

「何を、でしょうか？」

「街は身体的能力は上げても……って」

それとこれと、一体どんな関係が？

「貴方の身体的能力をあげた存在と、貴方が対面すればいいのよ」

「……そうなんですか？」

「ええ」

あの精神世界の生き物のような存在と、対面？

それこそ、夢でも見ている気分だった。見る事はなく、感じるだけの存在。それが街。

「どこにいるのか、私にはわからないけれどね」

結局、対面するのは難しいらしかった。

けれど、まあ、そんなに直ぐに強くなりたい訳でもなければ、強くならなければいけない訳でもない。

なんだかんだ言っで、平和な場所だ。

「そもそも、都市伝説間の力学の基準は、私達とはかけ離れたものだもの。急ぐ事はないわよ」

「はい、博士」

全く、博士のいう通り。

僕が強くならなければいけなくなるのは、きっとアイツとぶつかる時ぐらいだろう。今のところそんな予兆は少しもないのだが。けれどもこのさっきのように彼女の存在がからんだらばどうなのだろう。さっきよりも、さらにアイツが怒ったらば。

僕は勝てない。勝てないだけならいい。殺されそうだ。「冗談じゃない。」

「困ったな」

「何が」

そう問われても、どうとも言えない。なんとなく困った気分になっただけだから。

僕が答えずにごまかしていたら、博士は興味をなくしたようで、ラボの奥へと行ってしまった。そのままそこに居てもよかったが、何となく気分転換をしたかったから、僕はまた外へと出て行った。

そこにあるのは、赤レンガで出来た紅色の街なみ。僕の存在の由来となった、紅街。その街の化身であるらしい僕。どこがどう化身なのか、僕には全く分らない。

「さっきは悪かったな。あれは習性みたいなもんだ」

「あ、うん。気にしてない」

ラボを出て、暫く歩いたところで、僕は一番会いづらはずの人物と出会った。

“蒼雪の守護者”

「……どうも、“白塔”が絡むと冷静になれないんだ。俺がどうかという訳じゃなくて、“蒼雪”だからという理由でな」

「……………」

彼の言いたい事が分かる気がする。

都市伝説である僕らには、僕らを都市伝説にした何かがある。

それが僕らに何かをさせるときに、僕らは自分が分からなくなるの
だろう。

……僕はまだ、その体験をはっきりはしていないけど。

「……………」

と、彼は言っ、僕を見た。

「お前を好ましく思っ、てないのも確だな。いや、お前じゃなくて、
“紅街の化身”が嫌いなんだ」

結局は僕の事が嫌いだ、と言っ、ことでもいいのだろうか。

「紅街は、ああ、お前じゃない。前の奴だ。あいつは、俺らを、そ
して白塔を裏切った。だから、嫌いなんだ。紅街はまた裏切るよう
な気がしてな」

「僕が裏切るっ、て？ ふざけるな」

「どうだか」

所詮、僕と彼は仲良くなん、てなれないんだろうか。初めてであつた
ときは僕を助けてすらくれたというのに、どうしてこうなんだろう。

「ああ、森に帰らなくては」

呟いた彼は、僕の存在なんかは完全に無視して、スタスタと歩いて行ってしまう。そして僕が一瞬目を話した隙に、姿すら消してしまふんだ。

まるで、消えるみたいに。

僕には出来なくて、あいつには出来る。

「ム力つくなあ……」

力の差がよく分かる。

この気持を少しでも落ち着けようと、僕は知らず知らずに街の入り口まで歩いていった。

黙々と歩いた割りに、当然のように行き着いた街の入り口。そこに、男が一人立っていた。

無惨な掻き傷によって潰された右目と、サングラス。笑みの張り付いた表情。

荒野を背にした男は、明らかに僕より大きく、この街を、そして僕を知っていた。

「おかしいな……ちゃんと始末したはずだったんだが……」

男は隠す事なく言う。僕が聞いても、問題ないかと言うように。実際、問題はない訳だけれど、どこか引つ掛かる。

「やはり、いくら人間が近付かないからと言って、この街の近くで処分するべきではなかったか……」

「え……えっと、大丈夫、ですか？」

表情を変えずにブツブツと言う男に、僕は少し警戒しながらも、具合が悪いのではないかと思い、声をかける。

すると、男はいきなり笑いだした。

「大丈夫ですか？……くくくつ、お前、俺に……大丈夫ですかだって？」

「何がおかしい」

「何がって、ははっ！ 覚えてないのか、ラズイーン？」

「？」

最後の単語だけ、妙に頭に残る響きだった。それだけが頭を回る。けれども、何のことか分からない。

「そうか、覚えてないのか。なら、いい」

微笑みながら、男は懷に手を持って行く。

瞬間、頭がピリツとした熱を放つ。危険だ。そう思った瞬間だった。

僕の手は、宙を掻き、そして地面をえぐる。

「これは驚いた……誤算だな」

さっきまで自分の立っていた場所を見つめ、銃を構える男。僕より、動くのが速かった。

男の持つ銃は、猟銃のように長い癖に、片手で構えられている。

何と無く、獣じみた僕にはお似合いなんだろうかと考えた。

「“紅街の化身”……お前が埋め合わせなのか」

「？」

相変わらず、訳の分からない事を言っている男は

「そうか」と一人で納得する。

「お前が、エアエアに接触出来たのは……ここに来るためだったんだな」

「エアエア？ お前、何を！」

何故だろう。

記憶のない僕なのに。自らの名すら忘れてしまった僕なのに、その名の人は覚えていた。

エアエア。黒く長い髪、美しい女神。従うのは、白銀の狼。大地に生き大地に還る者らの母にして、偉大な空神、スアヌスの妻。

僕は、その女神に出会ったことがある。

「エアエアの託選を受けた子よ。お前はここに必要ない」

「！」

それは当然といえば、当然の行動だった。けれど僕は反応できない。エアエアの名はあまりにも影響が強すぎた。

「邪魔なんだ。消えてくれないか」

低い声と共に銃声が響き、パツと赤が散る。

幸い、条件反射で動けたせい、即死にはいたらなかった。

「けふっ」

咳をすると血の混じった空気が出て、僕は左側の首を押さえる。

べとべとした血が気持ち悪い。

だらだらと腕にも伝う血は、僕の意識を奪うまでにもなるだろうか。

僕には“蒼雪の守護者”のような、超回復能力はない。僕は弱い。

「しっかりせえよ、お前」

ふらふらとして、立っていることも出来ないほどになった僕の前に、黒い何かが滑り込んだ。

男と僕の合間。

銃口を手で抑えながら、僕は見ないで男を見ているそれ。

「何しに来たんだ、お前はあ。あれだろ、勝手に出てったくせに」

「……ああ、悪かったな。だが、俺にはやりたい事があつてな」

そんな会話をしていたはずだ。会話をしながら、ぎりぎりと銃口の位置がずれていく。

「悪いけどさあ、フェアじゃないから、ここは逃げるよ」

ばんっ、と猟銃を放り投げ、黒い何かは僕を抱えて、跳ぶ。

霞んできた意識の中で、落ちかけた僕の手の上から、冷たい掌が重ねられたのが、最後の記憶だった。

六話目：スアヌスの息子 エアエアの娘（前書き）

半分寝ながら書いた結果です。……色々とすみません。時間がなかつたんです。

六話目：スアヌスの息子 エアアの娘

黒い何かが、どうしてラボの場所を知っていたんだろう。そうは思ったものの、口に出す事は出来ない。

「……あいつ帰ってきた」

「そう」

虚ろげに天井を見上げている僕には、二人の会話しか聞こえない。

知り合いの様だが、黒い男が博士を訪ねてきたことは一度もないはずだ。

少なくとも、自分が来てからは。

「もう二度と会わないって思ってたんだけどなあ」

黒の男の呟き。

「私は絶対会つと思ってたわよ」

博士の言葉。

分らない。あの隻眼の男と、黒い男、そして博士の関係。僕と白塔の少女を知っているというあの男……嫌な予感しかない。

眠っているのがもどかしい。

けれども、どんどんと眠りに引きずられていく僕は、逆らうことなど出来なかった。

そこに行つて、僕はその理由をしる。

+ + + + +
+ + + + +

目の前にいたのは、銀色の狼。

僕の知る、女神の隣に座っていた狼。

辺りを見回すと、世界は濃く深く暗い青の世界。まばらに煌めくのは星のようでそうでない。

足場も右も左も上も下も、延々とその世界だけが続いている。

「……………」

知らない場所だが、不思議と警戒心はなかった。どちらかといえば、安心するような、懐かしい……そう、気配。自分がそう思うのではなく、懐かしい気配がする。

それは女神と対面した時の、包容力とも違う。

知っている。記憶がなくとも、この感覚。

と、不意に狼が僕に背を向けた。小走りに行ってしまう狼を僕も小走りで追う。

本当に変わらない景色。自分が移動しているのかが分からない。ひたすら足を動かしているだけのような気すらしてきた。

けれど、僕は立ち止まる様なことはしない。その必要がなかった。

走っても走っても、疲れない。息もきれない。

不思議だ。

「……………」

それからどれだけ狼の揺れる尾を眺めていたろうか。

いきなり加速した狼が、僕の視界から消えた。

見渡しのいい空間で見失うなんて有り得ない。眼前で消えた狼を探しながら、キヨロキヨロとしていると、これもいきなり、横に少しばかり長い椅子が現れた。

銀の手摺と縁取りには、細かな細工が施され、柔らかそうな背持たれやクッションは青みがかっている。

そしてそこに、それはいた。

銀でなく、黒い狼が、座った状態でこちらを見つめる。椅子の斜め下で、じっと。

「……」

立ち尽くす僕の前で、その椅子の上で蹲るように横になっていた何かが身を起こした。

中性的な顔立ちに、輝かんばかりの白銀の長い髪。輝く鋭い瞳も銀。透き通るほど白い肌は、血液が通っているものの色ではなかった。

よく分からない、薄い蒼の長衣を纏うそれは、僕を見て、安堵したように微笑んだ。

『……ああ、間に合ったか、我が息子』

風が吹くような、透過して行く声音の主は、ゆっくりとあしを降ろし、するすると歩いてきて、僕の前で立ち止まる。

首筋に触れられた瞬間、ピリ、と痛みが走ったが、我慢できないものではなかった。

『誤って世界の輪の中へと沈めてしまった我が息子よ。どうか許してほしい』

そう言うその足元で、黒の狼も鼻で鳴く。

けれども、僕にはよく分からない。

目の前の存在が何を話しているのか、分からない。

ただ懐かしくて安心できる。

『あの日、創世の日。あれが三人の娘と、我が息子をこの大地の守りとし、我等は眠りに付くはずだった。……しかし、我は…我が息子を人間の輪の中へと沈めてしまった。世界を支える大地にあれば眠り、世界を見守るこの場所に我は眠っていたのだ。永遠をこの場所で過ごせるならば、どれだけ穏やかにいられたことか』

瞳を伏せ、ゆつくりと僕を抱き締めたそれ。懐かしい、そして、少し冷えた感じ。安らぐのはなぜだろうか。

『時は満ちた。我が息子よ。あれが力を継ぐ娘等を護のが本来のおまえの姿。我が力を継ぎ、娘等を守るのだ。一番は心配ない。あれには既に守りがいる。問題は……二番目だ。あれは愛ゆえに惑わされている。醒めぬ夢に踊らされ、三番目を脅えさせているのだ。我が息子よ。どうか、娘等を護ってやってくれないか。おまえの姉にして妹であるあれが娘を』

言葉を聞きながら、僕は満たされていくのを感じていた。

とても透き通った、綺麗な力。広がり染み渡る涼しさ。

外側からではない内側から広がってくる。

『どうか、我が子等よ』

するり、と離れたそれは、満天の星空を背にして、微笑んだ。

僕と、三人の娘に。

『健やかに、幸せであれ』

微笑んだ表情。銀色のが離れない。

スアヌス！

まさに霧が晴れるように消え行こうとしたそれに、口はそう動いていた。

そうだ。あれは……空の神、スアヌス。

エアアの夫。

そして自分は彼の掌を知っている、息子。

ああ、と僕は思った。

僕が街へ来たのは、きつと……スアヌスに会うため。

消えてしまった世界に、僕は未練を残さない。

僕はやらなくてはならなくなった。

……護る、ということ。

.

七話目：森と守護者

目が覚め、僕は清々し過ぎる気分には動揺していた。同時に、目の前の光景にも。

「博士！！」

飛び起きて叫ぶと、ドアの向こうから博士がかけてきた。

「無事だったのね」

崩れたラボの天井は、空までよく見える。黒く焦げたそれらは、自然な倒壊では有り得ないだろう。

ラボ自体、自然に倒壊することは無いのだけれど。

「まあずいな。不味い不味い。紅街よ、不味い事になったぞ」

博士の後ろからついてきた、黒いフードコートの男が口をへんの字に言う。

何が不味いのだろうか。始めから説明してほしい。何が起きているというのだろうか。

そう思った矢先だ。

頭上を日の玉が通過し、向がわで爆発した。

悲鳴をあげた博士をかばいながら見たのは、空を飛ぶ機械。見たことが無いそれは、けたたましい音を立てて塔の方へと飛んでゆく。

『E t e k u s a t ! ! 』

キーン、と耳鳴りがして、声が聞こえた。聞き覚えがある。聞いたことがある。

そうだ、僕はこれを知ってる。

「今、行くよ」

「え？」

呟いて離れた僕に、博士は顔を上げる。僕の代わりに博士に付いた男は、ニカリと笑う。そこで始めて見えた。

彼は金の髪。そして……目はアオすぎるアオ。

僕はそこにたどり着いて初めて、自分の能力の違いを感じた。

それは “ 蒼雪の守護者 ” には出来て僕には出来なかったこと。
僕が未熟で、そして相応ではなかった為に出来なかったこと。

瞬間移動。

思い描く。 というよりも、 “ 白塔の幽霊少女 ” を思っただけで、僕は飛べた。

僕は、彼女を守らなくてはならないから。

「あ…あ」

突然現れた僕に脅えた様子の “ 白塔 ” 。

脅える必要は無いんだよ、と僕が微笑もつとしたときだ。

彼女はいきなり僕の腕をつかんで、そんなに早くない歩みで走り始める。ふと見た窓の外は、眼下に煙をあげる街と、森の姿があった。目を細める僕の内側に、モヤモヤとした感情が生まれる。どうしてこんなことに。何て酷い姿に。

そして、彼女に連れていかれたのは、塔を登るための階段。その中腹だった。

「なんだ……お前か」

「蒼雪」！

階段に転がるように横たわっていた。薄く目を開いた彼は、外傷は見当たらない。だが、一言。その一言で分かった。

「熱い……燃えてるんだ」

窓の外を見た“蒼雪”は、はあ、と息をつく。外見には変わりはない。しかし彼は“蒼雪の守護者”だ。

森と感覚を共有していてもおかしくはない。

「火を……消さないと。彼女が死んでしまう……」

呟きながらも、彼は全く動こうとはせず、目は虚ろに宙をさま迷っている。

動かないのではなく、動けないようだ。だから“白塔の幽霊少女”が呼びに行こうとしていたのか。

僕はふと迷う。

森の火を消しに行くかどうか。火を消さなければ森共々“蒼雪の守護者”は死んでしまう。けれど、行ったとして塔に何らかの攻撃があった場合……消耗している“蒼雪”ではきつと対処しきれない。

一緒に連れていっても、危険な目に合わせるだけだろう。

「……」

無言で考えていると、声がした。それはあの、涼しげな銀の声。

『我が息子よ。お前の考えていることはよく分かる。この塔は我のモノ。塔は我に任せ、お前は森に行くがよい。街はもう……駄目だろう。人間も皆、逃げ出し死に絶えた。街を棄てたあれが娘は、既にあの男からは離れられぬだろう』

「……」

『お前は端から“紅街の化身”ではなかったのだ。お前は新しく名を連ねる“銀界の神子”。それがお前に与えられた名』

僕は“紅街の化身”ではない。だから、街が傷付いても、少しの痛みだっただけじゃないのか。

“蒼雪”はこんなに苦しい思いをしているのに。

『……さあ、行け。優しく我が息子よ。あの炎を退け、戻ってくるがよい』

自信と期待のみでとれる声音に押され、僕は黒く煙をあげる森を見る。空を飛ぶ機械が、何かを落としていた。地面にぶつかると同時に爆発して、炎を広げるそれ。

見た瞬間、まずあれから潰さなくては、と思った。あれがなくなれば、後は炎を消すだけだ。

軽く目を閉ざし、機械を思い浮かべる。内部の構造まで鮮明に見えるが、それは関係ない。

僕はその真上に移動して、持ち前の腕力で一気に地面に叩き落とす。

爆発も出来ず、真ん中からペシャンコになった機械から、人間が二人這い出してきた。死んでないなんて、奇跡だ。

普通の人間じゃないのか？

森の地面に降りたって、二人の人間を睨む。森や街を滅茶苦茶にしたのは、こいつらだ。怪我はしているらしい奴らは、逃げる機会をうかがっている。

「行けば」

今殺す必要は無い様に思った。今は速く、炎を消さなくては。

“蒼雪”が死んでしまう。

走り去って行く奴らの気配を背で感じながら、僕はその木を見上げた。

“蒼雪”に初めて出会った場所。首の傷を癒した場所。巨木の足元にある、ドームのような彼の空間にも、炎ははびこっていた。

「……セイショウ・リオト」

口からスラリと出た言葉は、周囲から音を奪い、まるで雪降る静けさのように辺りから熱を奪って行く。

熱が無くなり、炎の存在も消え去った。静かに涼しい風が吹く。

「……」

無言で立っていると、いつの間に居たのか“蒼雪”が、僕をフラリと追い越し、巨木の根に手をつく。

呼吸をするのもやっとと言った様子で、思考があるとは思えない虚ろな表情。

僕を叩き伏せた人物とは思えない。

「アートローシア……アートローシア……？」

よろよろと歩く彼は、エアアの娘、一番目を呼んでいた。彼を都市伝説に変え、自らの騎士と決めた、女神の名前を。

「アートローシア」

とっ……、と“蒼雪”が両膝について、倒れながら目を閉じる。

支えてやろうと走る寸前だった僕は、蒼く艶のある長い髪に目を奪われた。薄緑の淡いグラデーションのついた、シンプルなドレスを纏う、涼しげな女性。

一目で分かった。

“蒼雪”を受け止めた彼女が、この大木であると。そして、僕の姉であり妹であると。

『…………』

「…………」

言葉はなくとも、その思いは分かった。

僕や“白塔”と違い、すでに木と同一化しているアートルーシアは、この木の周辺から動けない。だから、“蒼雪”に頼む。

自分を守り、そして姉妹を手助けするために。

今回はそうならなかったが。

仕方がなかったと思う。僕らは、博士のラボにある程度の機械しか見たことはなかったし、破壊兵器については話に聞いた程度だ。それに不意をつかれたということもある。

元から白い顔色の“蒼雪”は、本当に死んだように眠っていた。

僕が巨木のドームからでた瞬間、入り口が太い幾重もの根で隠されてしまったが、僕は何も言わない。言う筋合いも、必要もない。

「…………」

小さく息をついた僕は、そこにあつた木に背を預ける。初めてスアヌスの力を使つたからだろうか。

とても、疲れた。

八話目：人の子として産まれた神の子

僕が白塔に戻ると、あの黒ノツポの男がいた。“白塔の幽霊少女”と一緒に。

何事だ。

そうは思えども、疲れてしまった僕は、何も言えずに、階段に座り込む。博士はどこに行ったのだろう。

体の調子がおかしいから診てもらおうと思ったのに……。

「おゝい。大丈夫か、紅街」

「僕は、紅街じゃあないです」

壁にもたれかかり、目を閉じていた僕に、男が声をかける。

“蒼雪の守護者”よりも、少しくすんだようなアオの瞳。ひよろつとした体つき。

猫のようだ。

「ん？ 紅街じゃない？ 何言ってるの」

「……」

「自分で言ったこと分かってる？ 紛れもなく紅街じゃろ、君は」

説明するのが面倒臭い。

話しかけないでほしいのだが、それを言うのにすら体力を消費し
そつで、僕は無言で壁にもたれる。

やっぱり変だ。

「あら？ ちょっと、どうしたの」

「あ、紅街がさあ、何かおかしいんだよ、言ってることとかが」

「……博士」

崩れたラボから、使えそうな機材を、運搬専用ロボに運ばせてき
た博士が、僕に気付いて動きを止める。

男が言う事に反応すらしなかった僕に、博士は歩みよつて……初
歩的に額に手を当てた。

「熱いわね。熱いわ」

「熱だしたのか、紅街」

「……」

ああ、どうりで余り危機感の無いだるさだと思った。しかしながら、この体になってから、熱なんて出したことは一度も無かったのに。

「だ、大丈夫……？」

「……あ。うん。大丈夫」

僕を氣遣つてか、白塔が僕の額に手を伸ばす。指先でちゃんと触れただけだったが、少し熱が和らいた。

風が吹けば消えるような声音で、彼女は呟く。

「森の熱を、引き取ったから……」

ああ、と僕は納得した。

あの時、火を消した時だ。あれは消したのではなく、僕自身が熱を取り込んだんだろう。あまり調子に乗って力を使いすぎない方が良さそうだ。

とは思うものの、どこらへんが限界なのかも分らない、この力。自分の中にあるのが当たり前になっている力。銀色の光。

僕は何も知らないのに、それでもこの力を使うんだろう。

“蒼雪”がいないんだから。

彼がいれば、僕が力を使う必要はなくなるだろう。僕よりも、あんなに強い彼なんだから。

「んゝ、んゝ。どうしたもんかね」

僕を背負って、博士について階段を上っていた男が呟いた。

「俺には何も分からんよ」

「元都市伝説のくせに、使えないわね」

「俺、無理したことないし」

「だからフラレたのよ、あなた」

この男、都市伝説だったのか。道理で人間っぽくないと思った。

僕から見ればの話になるが、都市伝説は、どことなく軽い。人間と比べて、存在というか、雰囲気というか、それに近いものが、薄くて軽い。

そこにいるのに、触れられないような気がする薄さ。

「ああ、フラレたって……。違う、違うんじやて！ アートローシ
アが余りにも人使いが荒すぎて、俺から縁を切ったんよ！」

「……それ、最低よ」

言わなきゃよかったのに。この人、正直に何でも話しすぎだ。

「おいおい、紅街……？」

「……」

返事をしようとした。けれど、出たのは、息でしかない言葉にな
らなかった空気。

思った以上に、体がおかしくなっているようだ。

「熱い。お前、すごい熱いぞ。おい、紅街？」

「あまり揺さぶらないで。もう、情けないわね、あの程度で」

「……キツイな、相変わらず」

階段を上った先。頂上に着くまでに何個が存在する部屋で、僕は身に覚えがある感じの、少し固いマットのようなものに寝かされた喉の傷がうずく。

薄く開いた視界の中で、カプセルの様なものがしまっていくのが見える。

「冷やせば良い話よね。考えた結果、これが一番応用しやすいの」

それが記憶の最後。

次の瞬間には、冷気が体を包み、眠りに僕を引きずり込んでいた。

僕の記憶。家族がいた。普通の家に産まれて、普通に学校に行つて、やりたいことをやったり、やりたくないことを何故かやったり。そんな当たり前の日々。

皆優しかった。普通だったけど……僕は常に他とは違つと、感じていた。

何と無く、重みがない。全ての感情に対して、反応が薄い。

でも、別にどうにもならなかった。イジメられもしなかったし、虐待も勿論なかった。

普通の日々。けれども、それは急に終わったんだ。

僕がある人にあつて、ある人達に見付かったから。

『あの塔に向かいなさい……貴方のやるべきことが待っているから……待っている人がいるから』

空気に溶けた彼女。

大地の女神、エアィア。

僕の第二の母ともいえる彼女は、とても聡明で、優しい人だった。

大地に還るだけだから、いつでも大地が有る限り、貴方の側で見守っているから。

そう言われて、酷く安心した自分がいた。

その後が、地獄だったんだけど。

『人殺し！』

それは家族と出掛けた先でのこと。僕はその一言を叫びながら、誰もが居なくなつた空間に叫び、ソレから逃げる間も、走りながら叫び続けていた。

『人殺し、この人殺し、人殺し人殺し人殺し！！』

怖くて怖くて泣きながら、泣き叫びながら、でも走って走って。

叫び疲れて、電車の最終車両の更にその端で座り込んでいたり、自動トロツコに勝手に乗り込んでいたり。ひたすら移動して、あの場所から離れようとして、それでたどり着いたのがここだった。

図らずも、女神に言われた街。

けれども、僕の運命はそこで終わった。

『いたいた』

『……っ』

『こいつ殺ればいいんだろ？ こんなガキにあんな金だすなんてな……お前え、なにやっただよ？』

街に入ったところで、ついに捕まった。

大きなナイフをちらつかされ、僕は息を飲む。そして

『ひ、人殺し……』

絞り出された言葉に、赤い一閃としぶきが辺りを染めあげた。

『…………』

「…スアヌス」

夢なんだろう。そう思いながら、僕は彼を呼んだ。

スアヌス。僕の父親。そして今、横たわる僕の傍らに佇む人。

「…………」

ケース越しに、すまなそうな顔が見える。どうしてそんな顔をするのかわからない。

僕は、どうして、そんな顔をさせてしまったのだろう。

と、ケースをすり抜け、彼の手が僕の額と目の辺りを覆った。

『すまない。我がお前の体を気遣ってやれぬばかりに、苦しい思いをさせる』

「…………」

『人の体が、我等の力に耐えられる訳はないというのに』

そうなのか、と、思っただけ。

『……力を、使ったび、お前の体はヒビ割れる様に脆くなる。枯れ逝くように弱くなる……すまない』

「大丈夫……それでも、いい」

だって、ここさえ守れるなら、それでもいいのではないかと思っ
た。

だってここは……

「空に一番近くて、スアヌスが居る塔は……」

この大地と、この空を支える……世界の柱なんだから。

ここさえあれば、僕は。

「また、生まれ変わって来れる」

その答えが、スアヌスを喜ばせてやれるのかは、わからないけど。

九話目：銀界と優しさ

この街は、世界で一番始めに造られた街。それは世界を支える場所。塔は空をこの地と繋げる。

その大地を守るのが紅街の女神。鎮守の森を守るのが蒼雪の女神。そして塔を守るのが白塔の女神。

本来ならば、それら全てを守る、銀の男神がいたはずだった。

世界を守る、神が。

「大丈夫？」

え？ と顔を上げた先にいたのは博士だった。片手に持ったコーヒークップを僕に差し出す。

なんだろう、と思って、でも受け取ろうとした僕に、博士は目を細めた。そして、カップ掴んで数秒してから、不意に取り上げられてしまった。

「火傷」

「え？」

「火傷してるわよ、手」

「ええっ!？」

びつくりして見てみると、確かに皮が捲れかけていて、水ぶくれにもなっていた。でも、痛みもなければ、掌の感覚に異変も感じられない。驚いた。

「最近変よ、あなた。食事もしなくなっだし、寝てもないじゃないかい」

「……」

それは単に、空腹感も眠気もないからだ。けれども考えてみればおかしい事ばかり。いやに頭の中がすっきりしていると思えば、意

外と周りの言葉を聞いていなかったり。そう、感覚が遠くにあるような、ずっと向こうの事柄を見つめているような感覚を覚える。

これが、スアヌスが言っていたことへの前兆なんだろうかと思いつながら、僕はこの静かな日々を送っていた。

蒼雪の守護者が倒れてから、もう一週間と数日。空を飛ぶ鉄や、爆弾なんかは振ってこない。その代り、街は崩れ去って、人々の大半も死に絶えた。生きていた人たちだって、ここまでに何人も死んだだろう。

それでも、街で生きている人たちはいる。

それを、あの黒いノツポが助けに行っているらしいのだ。白塔を連れて。どうして奴が彼女を連れていけるのか、いや、それ以前に何で彼女が奴についていくのか。僕はどうしても納得できなかった。僕とはじめて会った時は、あんなに驚いていたのに。

とても、不快だ。

「……本当に痛くないのね」

「え」

博士の声がして僕が顔をあげると、手には手当の跡があった。過去にやけどをした時の手当は、少しばかり痛かったような気がする。火傷は厄介だ。

でも、今は何も感じなかった。考え事に没頭できる程度の痛みだったのか、それとも、痛みを凌駕するほどの考え事だったのか。

とにかく、僕は今の治療になんの痛みも感じなかった。それどころか、すべてのことにおいて、何も感じない。触れているという感覚はあっても、それ以上は感じられなかった。即ちそれは、人間として生きていくための危険が分らなくなってしまったという事実。

「便利な体になったものですね」

軽く言うと、博士に叩かれた。

「そついう簡単な話じゃないのよ。馬鹿ね」

そう。僕という人間は、博士ほど頭はよくない。人間として生きていく上での危険が分からなくなった程度で死ぬなんて考えなかった。危険はあくまで危険であるだけ。危険が分からないからと言って、すぐに死に至るなんてことは滅多にない。

そう思っていた。いや、そう思っている。僕はそんなに簡単に死ぬことができる立場の人間じゃない。それはスアヌスが、エアィアが教えてくれたことだ。もし、ここで僕が死んだならば、それは死した方が都合のいいシナリオ上にいるのだろう。

生きるにしろ、死ぬにしろ、僕は僕が思うように、思ったようにするしかない。だって、誰の願望も僕には分からないのだから。だ

ったら、自分で考えるしかないじゃないか。

今までは、博士の後ろをついてまわって、博士に危害を加える人間を叩きのめしていればいいだけだった。本当なら、そういう人生で終わっていたのかもしれない。けれども、僕は知らなくてはいけなくなつた。

自分が、紅街ではないこと。本当は銀界という名を与えられたであろうこと。そして、白塔と同じく、人ならざる存在であつたであろうことも。

僕はもう、知ってしまった。僕がやらなくてはいけないことや、どうしてこうなつたのか。僕は教えられたし、それをしようと思つている。

だから、この体がどうなるうとも関係ないんだ。この命がある限り、僕はやるべきことをやる。やらなくてはいけないことをやり続ける。義務だからじゃない。自分でもやりたいと思つているから。

さつきも言つたけれども、僕は博士みたいに頭が良くないから、どうしたら一番いいのかも分からない。分からないけど、やっぱり。

「簡単な話にしないと、僕、分からないんで」

結局、僕はまた、博士にバカ呼ばわりされてしまった。

ゆつくりと眠れる世界とは、どんな世界なんだろうか。

真夜中に一人、空を見上げる僕がいるのは、白塔の頂上だ。今まで一回も来たことがなかった。紅街の時は、森に近づくことすらしなかったし、銀界になってからは来る暇が、というか頂上という概念を忘れていた。

そしてようやく、なんとなく空が見たくなって、上ってきてみた。

この星は丸いから、あり得ないことだと思いつつも、まるで世界全部を見渡せると思うくらいに、高く、さえぎる物のない場所だった。僕が感じるのは風だけで、鳥だって飛んでない。そして、雲もない。

この塔の周りには、いつも何もなかったような気がする。雨も降らない。雪は降るけど。雲もない。風は通るのに。不思議だ。今だって、見上げれば、星だけが広がる場所がある。

「そら、すき？」

「うん。なんか落ち着く」

僕の横に来たのは、この塔の管理者である白塔。でも、そんな彼女はここが苦手だといった。

「地面から、離れすぎてるから」

高所恐怖症というわけではない。彼女は大地の女神の娘なのだ。空の神の息子の自分とは違う。だから、彼女は本来、大地に近い下の階にいる。ここまで登ってきたのは、僕がいるからだろうか。なんて考えて、ちょっとばかり芽生えた喜の色。

こうして彼女と話をしたかった。紅街のころから、ずっとそう思っていた。でも、実現するためには、思うよりも多くの時間がかかってしまった。驚くくらい、大きな出来事が続いたんだなあ、と思った。

彼女は知らなくて、僕は知っている事も含めて。

「スアヌスに会った」

「お父さんに？」

「うん。僕は、本当は…銀界なんだって。紅街じゃないんだって」

「そうなんだ…」

彼女は思ったとおり、あまり驚いた様子は見せなかった。というより、それが当然だと思っっているようだった。僕を最初から紅街だと思っていなかったんだろう。

「だって、お姉ちゃんがないから」

白塔が言ったお姉ちゃん、とは紅街の女神のことだろうか。そういえば、博士にも言われていた。僕は、女神に出会ったことがないから弱いのだと。というよりも、女神に出会わずに“紅街の化身”になった僕の方がおかしいらしい。

というより、僕は、博士がそうだったから、自分は紅街だと思っただけだけでも。

でも、実際は似たような存在なんじゃないか。スアヌスに言われてそう思った。

「私は、怖い」

不意に白塔が言った。何が怖いのか、直感的にわかったのは、やっぱり彼女が女神であって、僕が神であるからだろうか。

白塔が怖がっているのは、かつての“紅街の化身”。街を傷つけて、蒼雪を倒して、森を焼こうとした、あの鉄を操る男。まるで邪

龍のような眼をしていた。つぶれた片方の目は、そこに存在していない。なくても、もう片方と同じようにギラついていたに違いない。

「不思議だな」

「？」

「君が言いたいことはわかるのに、どうしてあいつが思っていることが分からないんだろう」

分かれば、止めることもできるだろうに。そう思った。そして、白塔が怖がることだってないんだろうに。そしてたぶん、博士が僕の心配をする回数だって減るだろうに。なんて。

……僕はいつから、こんなに他の人のことを考えるようになったんだろう。

「銀界になってから、優しくなったよ」

「そうかな」

小さく言った白塔に笑って、僕は空を見上げる。太陽の光のせいで、星たちが薄らいできてるのがわかる。

「優しくなったかな」

優しくなれて、僕はどう変わったんだろう。優しくなれたなら、もっとそうなれたなら。僕は僕が思うように、周りの人たちを笑わせてあげられるんだろうか。

十話目：変化とか

例えば、それは空が見ていた真実であったりして。

例えば、それは夜空の下の悲劇だったりして。

銀世界はただただ、見ているしかなかったのなら。

僕と言う存在が、不在であつたせいの悲劇だつたんなら。

それは、僕の責任に、なるんだろうか。

スアヌスは言つたんだ。

子の不始末の責任は親がとるものだが、そもその原因は私にある。

って。

だから。だからかな。スアヌスは黙つて、眠りゆく僕を見つめていた。

そして僕も。

消えゆく父を、じつと見つめているのだろう。

母は大地に、父は空に。

姉らは街と森になって、残ったのは、白い塔の妹と、世界を見渡す僕だけになった。

優しくなりたい。そう思ったところで、そうなれる方法なんて誰も知らないんだと、僕は知っていた。僕が分からないのは当然だとしても、きっと博士にだって分からないんだろうと思う。

博士だけじゃない。たぶん、世界中のどこを見て回ったって、どんなに頭のいい人にあつたって、どんな偉い人でも、賢者と呼ばれる人でも、父さんも、母さんも、本当のお父さんとお母さんにだって、蒼雪も白塔の子も、僕の優しさの増やし方なんてわからない。でも、これだけは分かる。今、僕が言った皆が、僕の優しさになってくれる。増やし方は知らない。でも、皆のお陰で、僕の優しさって言うのは増えるものなんだ。

だって、僕は、皆に幸せになってほしいって思うようになっていたんだ。

そうだよ。紅街だって、紅街の姉さんだって。本当は、幸せになってほしいんだ。幸せになって、皆で仲良くしてほしいんだ。

そうして、お父さんとお母さんが、笑ってくれればいいんだ。

お父さんとお母さんが笑えば、皆笑ってくれるって、分かったからさ。

分かったから、僕はこの体を捨ててしまってもいい。そう思った。皆が笑うために、僕の体は重すぎる。まるで、石像を内側から動かしているようだ。空には飛び立てないし、走る事も出来ない。ただ、緩慢に地面を這うようにしているだけなんだ。

「……どうしたの？」

最近、漸く、“白塔”が話しかけてくれるようになった。

時々、攻撃を仕掛けてくる、元紅街だけれども、初めに思いつき

り叩きのめしてやったせいか、戦力がなかなかそろわないらしい。本当に、つくような攻撃しかしてこない。

スアヌとエアアが、街と森と塔を守るために作った防衛機能がある。厳密に言くと、それぞれを守護する娘達を守るための機能。そのおかげで、ある程度の攻撃は白塔には当たらない。娘の居なくなつた街には当たり放題だけれども。

だから、僕が気をつけなければいけないのは、“蒼雪”と一緒に、大木の下にこもってしまった娘のいる、森だけだった。それにしたつて、元蒼雪が手伝ってくれるから、それほど無理はしなくていい。今の僕はきつと、無理をしたら砕けてしまう。そう、感じる。

何もしなくても、少しずつ、風にすら削られていくような体だ。僕が僕に気づいてしまったが故に、体は石になる。誰にも気付かれることなく、石になる。

けれどもそれは、僕の死であるわけではない。そうだ。これは、本来なら体験することなんてなかったはずの、成長過程なんだ。そう思う事にする。

「神様も成長するんだろうなあって思つて」

笑う僕に、“白塔”は首をひねつて、変なの、と言っただけだ。そして、階段の途中だけれども、僕の横に腰を下ろす。

“白塔”は塔の高いところが苦手だと言っていたけれども、僕がよく高い方にいるから、最近はこちら辺の階をウロウロしている事が多いらしい。ちなみに、ここまで上がってくるのは、僕が白塔ぐらいだ。

博士も元蒼雪もここまで来ない。

「“白塔”はさ、名前、ないの？」

気になっていたことを、聞いてみた。

彼女に会ってから、その前から、僕は、彼女の事を“白塔”とか呼んでない。呼びにくい、と思った事はないし、むしろ、名前を気にする事の方が珍しいと思う。

だって僕は、博士の名前を知らないわけだし。
でも、“白塔”の名前は気になったんだ。

「クオロトーリア」

小さな声で、彼女は答えてくれた。
クオロトーリア。

「僕は、ラズイーン。スアヌスじゃない、僕の父さんと母さんが付けてくれた名前。僕の」

そう。自分の役柄なんかには関係ない。僕自身の、名前だ。

「大切な、誕生日プレゼントだよ」

僕の生まれる前から決まっていたかもしれない。でも、これは僕に、生まれてくる僕の為に用意された、用意してくれた名前。

「嬉しそうだね」

「うん」

おかしいな。今まで、こんな気分にはならなかったのに。

当り前のものだと思っていた。こんな普通の事に、こんな喜びを感じる。僕は、やっぱり変わったんだろうか。

でも、この変化は。

やがて来る、僕の終りへの、準備なんだろうな。

十一話：僕が終わる日

僕が終わる日。

それは始まりの神が眠りにつく日。

そして始まりの地にして、終りの地であるこの場所を、痛みが襲う日。

始まりは良い。全ての始まりは希望に満ちている。

終わりは嫌だ。だって、全ての希望が消えてしまう。

だから、ラティースと元紅街の化身は、この地にやってきた。

全ての滅びを、ないものにするために。平等に与えられる終わりすら、どこかにやってしまうために。

でも、それって。

今の自分のままでずっと留まり続けるってことなんだよ。それって生まれ変われないってことなんだ。変われない。変化は良いものだけでないかも知れない。でも、良いと悪いを繰り返しながら、人って変わってゆくものだよ。

自分だけの優しさを見つけるものなんだよ。

「お前には変化の恐ろしさが分からないだけだ。終わることへの恐怖がない。……離れなければならぬ不安がどれほどか、分かっているだけだ」

若いな。と、元紅街は僕に対して、というか、僕の後ろにいる白塔に向って、猟銃を構えた。意外な事に、彼はたった一人でやってきた。

いや、違う。

彼が連れてきた人たちは、きっと、元蒼雪と、スアヌスとエアィアの防衛機能に阻まれているんだろう。その中を抜けてくるのは、元紅街にしてみれば簡単なことなんだろうな。

「ここは全ての世界の滅びを呼ぶ場所だ。この白い塔がなくとも、世界の支えは失われない」

僕の後ろで、白塔がびくりとした。

実際、そうなんだろうなって思う。だって、この塔が無くても、空は落ちてこないし、きっと大地と空の距離だってそのままだ。でも、ここに塔がある意味はある。

「この塔は滅びを呼ぶ。世界を創りし神々が残した、世界を壊すスITCHだ。……そうだろう？」

彼の目は、僕を通り越してクオロトーリアに。

「それが、どうした」

彼女を庇うように立ち位置を変えて、僕は元紅街を睨む。

「滅びは誰にだってやってくるものだ。僕にも、君にも、クオロトーリアにだって、この世界にだって。それは、ここを壊しても変わらない。この塔は確かに滅びを呼ぶのかもしれない。でも、それはいつかやってくるものでしかない。…それが分からない貴方じゃないはずだ。元、紅街」

「随分と口が達者になったな。紅街」

「違ったんだよ。僕は。確かにエアリアと話を出来るような存在だったかもしれない。だから、貴方は、自分の立ち位置とラティースを取られると思って、僕を殺した。殺そうとした」

僕は思い出した。僕がエアリアと話しているところをこの人に見られていたこと。普通に話しかけられて、普通にエアリアの事を話

して、彼女がなんて言ったのかも話したこと。

最終目的地が、この街である事も、僕はこの人に話していた。何も知らなかった、無力な僕でしかなかった頃の記憶。あの時は、ただ、僕に声をかけた通りすがりの人程度にしか思っていなかった。まさか、僕の家族と僕を殺すような人間だとは思わなかったんだ。もう、話せないように。そういう意味で、彼が僕の首を切るように指示したのか、確実に死ぬように実行犯の人たちが切ったのかは分からない。

でも、そんなものは関係なくなった。だって今の僕は、こうして言葉を伝えられる。

「僕は、僕の兄弟を護る」

「ラズイン…」

「大丈夫だよ、クオロトーリア。君も、ラティースも、姉さんも、蒼雪だって、博士だって、元蒼雪だって……貴方だって、僕は護りたい」

不安そうにしているクオロトーリアの手を握って、僕は思った。こんなに人の不安が分かるのに、どうして助ける方法は見つけれないんだろう。言葉だけじゃ足りないのだって、分かってるよ。でも、ここで力を使っても、意味がないと思うんだ。

不安の種を、消し去るだけじゃ、きっとそれは本当の解決方法じゃない。不安の種だったら、それから幸せの花を咲かせる努力をしたっていいと思う。したっていいと思うけれど、僕には、その方法が分からないんだ。

でもね。でもね。

「一つの見えやすい道に逃げたりはしたくないんだ」

「それが悩んだ結果でもか？」

「逃げるなら、それは悩んだ意味がない」

逃げるな。逃げるな。立ち向かえ。自分が良いと思える、最高のものを見つけるために。強くなくてもいい。ただ、そう願う、願い続ける心だけがあればいい。

今は、それでいい。

「まさか、お前にそんな事を言われるとは思っていなかったさ」

元紅街の腕がクオロトーリアから僕に向いて、猟銃の安全装置を外す。反撃の時間を十分に与えるように、ゆつくりと。引き金に指をかけて、ゆつくり、ゆつくりと狙いを定める。

外にいるのにおかしい話だけれども、天井にひびが入ったような衝撃と光が走る。

スアヌス。

そう思ったのが分かったのか、クオロトーリアが僕の手を強く握った。大丈夫だよ。言わない代わりに、僕は手を握り返す。そして、手を離れた。

同時に、銃弾が発射されて、手で払う。それは草の上に転がって、金色に光った。綺麗だな、と思った一瞬に、もう一発。次のは肩をかすった。

休む間もなく、次々と打ち続けられる弾丸に、僕は避けながら当たりながら、元紅街との距離を詰めてゆく。それでも彼の表情には焦っている様子など一片も見受けられない。そこにあるのは、焦りではなく、余裕が上塗りされた必死さ。

そんなに必死になれるくらい、元紅街は、ラティースと離れたくないんだろう。そして、ラティースも、そうなんだろうと思った。だって、彼女はもう、街を捨てて、彼の女神になったんだろうから。

「口だけなのは相変わらずか？」

「……だつて」

大地に倒れているのは僕で、その僕に上から銃を向けているのは元紅街。

余裕ぶつて笑つてるけれど、彼に浮かぶのは疲労の汗だ。さんざん振りまわした僕を追ってくるから、その場所一点に居ても、大分動き回つて神経をすり減らしたに違いない。

こうして大地に付しけるとよく分かる。どこかで、あの破壊兵器が爆発している。震動が伝わってくる。そして空を見ていると思う。こんなに広い世界なのに、どうして狭い世界にとらわれてしまうんだろう。いろんな考えが頭の中をグルグルして、僕はどうやって彼を止めていいのか分からなくなっていた。

彼の好きにさせれば、クオロトーリアが傷つく。でも、彼を止めたらきつと、ただではすまない。彼は死んでもここを壊そうという気迫がある。でも、ラティースはそんな彼しか信じてない。たぶんそうなんだ。

じゃあ、なんで、そうなった？

「護るに値する存在など一握りだ。それが分からないから、お前はこうなんだ」

「そんなことない。値なんて関係ない」

僕の言葉を聞いていなかったと思う。元紅街はその引き金を引いていた。躊躇もない。けれど、それは僕に当たらない。

「いつまで寝てる」

“蒼雪”！

猟銃をずらして、ついでに元紅街の腕を斬り裂いたナイフを片手に、涼しい様子で蒼雪は立っていた。僕を見下すさまはいつもの通

り。

「“蒼雪”！ 僕、“蒼雪”の名前が知りたい！」

「はあ？ 今はそれどころじゃ」

表情を険しくする“蒼雪”だけれども、僕にはそれは関係ない。それどころじゃない、とか、そう言うのは関係ない。僕は、彼の名前を知りたいんだ。

「“白塔”はクオロトーリア。僕はラズイーン。“紅街の女神”はラティシスで、“蒼雪の女神”はアートローシア！ だから、僕は“蒼雪”の名前が知りたい！」
「……」

どうしてだろう。さっきまで、あんなにぐるぐるいろんな考えが渦巻いてたけれども、今はたった一つだ。“蒼雪”の名前が知りたい。

元紅街を気にしながらも、“蒼雪”は渋い顔のままで突っ立っている。

教えてくれないんだろうか。そう、思った。けれど、違った。

「覚えていない。昔の話だ」

「覚えてない……って」

「俺にとって名前なんて集団の中から個を選別するための記号に過ぎなかった。この街には不要なものだった。だから、忘れた。俺の名前なんて“蒼雪”で十分……」

と、“蒼雪”が締めくくろうとした時だった。

まるで、雪の様に空から降ってくるような声は、少しばかり苦笑しているようだった。

『ウィルギウス…ウィルギルス…』

誰かを呼ぶような声は、姉さん。ああ。そうなんだ。

「ウィルギウスっていうんだ、“蒼雪”」

「…忘れた」

本人は本当に忘れてしまって、頭の片隅にもないようだが、彼の名前は確かにウィルギウスだろう。彼を守護者に選んだ女神が言うのだから。

「クオロトーリア、ウィルギウス、エアィア、スアヌス、アートロ
ーシア、ラティーシス、ラズイーン」

僕の知ってる名前を口に出してみる。自分も含めて、僕はこんなにも名前を知っている。そして、名前は知らないけれども、知っている人だって沢山いる。僕はその人達を助けもしたし、助けられもした。喧嘩だってしたし、人を殺した事もある。

それが僕の世界だ。

そして、今、燃えあがろうとしているのも僕の世界で、目の前で銃を構えているのも僕の世界で、僕の、僕たちの後ろで不安そうにしているクオロトーリアだって僕の世界。

どれを考えたって、僕の行きつく答えは一つだ。

僕は、全部、護りたい。

「……たとえ相手が神であろうと何であろうと、俺は目的を成し遂げるまでだ」

そんな彼の言葉に、また空がひび割れる。

どれだけ、スアヌスはこの為に心を砕いてくれるのだろう。既に力尽きて大地に帰ってしまったエアアの分まで、彼はたぶん、ここを守ろうとしてるんだ。それも、僕は護りたい。

「黙れ、裏切り者が！」

猟銃を僕に構えた元紅街に、ウィルギウスがナイフ片手に躍りかかる。綺麗に銃弾を受け流して、元紅街にナイフを振るうが、彼だって素人じゃない。避けて、隙を見つけて打ち込む。

それを見ながら、僕はぼんやりと考えたことがある。どうして、仲良く出来ないの、と。

空が悲鳴を上げる。星が輝く空は変わらないけれど、それが痛い。どうして、仲良く出ない。どうして、こんなに痛い思いばかりするの。どうして、そこまで不安なの。その不安は、どうにも出来ないことなの？

答えを見つけるには、僕は何も知らない。何も知らないで終わらせてはいけないのは分かってるのに、でも、知らない。こんなのはいい訳だ。だから、僕は、今の僕の世界を終わらせないといけない。

「クオロトーリア。僕ね」

「……」

「君の事、たぶん、ずっと好きだったよ」

「……うん」

会っ前から。“白塔の幽霊少女”と聞いてから、ずっと。出会えるのを心待ちにして、会話を楽しみにしてきた。ずっとずっと、そうしてきたように思う。

だから、ただふた事しか返してくれない君を、こんなにも愛おしく思う。同時に、少しさびしい。

ちよっとわかった。これが変わる不安。離れる不安、終わる、不

安。

「でもさ。それって、もう会えないってことじゃないと思う」

「うん」

「会えない訳じゃないけど……次に会う僕は、今の僕じゃないかもしれない」

「うん」

「だから、一応、言っておこうかな」

僕の目の前で、元紅街の銃が天高く舞い上がった。くるくる回るそれと、姿勢を低くして懷に飛び込んだウィルギウス。

空が砕け散って、僕の中に星空だけが残る。それと同時に、炎が始まりと終わりの場所を包んで、何もかもを壊そうとする。全てが終わる場所を終わらせたら、結局最後に来るのは全ての終りだというのに、どうして気がつかないんだろう。

それとも、世界の中でたった一つ、終わるのが怖いから、全部で終わろうと思ったのかな。さびしいのが嫌だったのかな。全部が終わって何も残らなかったら、悲しいと思う心もないんだろうに。ある意味、それはそれでいいような気がするけれど、でも、悲しいっていう気持ちも大事だよ。だって、それを感じられるのは、感じる心がある、命だけなんだから。

そうか。僕は命に恋をしている。でも、それ以上に。

「僕はクオロトーリアを愛してる。大好き。大好きだから……さよなら!」

「……うん」

始まりと終わりの塔の女神。彼女なら、きっと、分かってくれると思っていた。

僕は、生まれ変わるといふ事をしなくてはいけない。全てを代表

して、そして、手本になる様に。

「ウィルギウス！ やめて！」

「！ ラズイッ」

「！！！」

ウィルギウスのナイフは僕には届かなかった。そして、元紅街の猟銃だつて離れた所に落ちている。だけれども、全てを終わらせようとしていたものは、その焰を奪われ、傷つけるしかできないモノは、存在をかき消され。

僕はただ、消えてゆく星達の向こう側に、とてもまぶしい光を見ただけで、それがまさか自分だなんて思わなかった。

命つて、こんなに輝けるんだ。そう思った。太陽だよ。でも、太陽だつてずっと遠くから見たら、小さな星みたいな輝きにしかないんだ。だから、輝く星は全部太陽で、全部命で、だから、全部の命は太陽なんだ。

誰かに温かさをあげられる、太陽なんだよ。

僕は、そんな世界を見たいんだ。

.

十一話・僕が終わる日（後書き）

これで終わりではないんです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0629b/>

蒼雪の街

2010年10月10日02時38分発行